

■ 学校の共通目標

授業作り	重 点	・学習目標の明確化を図る。 ・ＩＣＴの活用を進める。 ・主体的・協働的に学ぶ学習を図る。 ・個に応じた指導を工夫する。	最終 評価	授業により知識や技術が身についたと感じた生徒が 74.9%(+4.5)、少人数の授業が分かりやすいと感じた生徒が 74.9%(+4.5)、ＩＣＴを使った授業が分かりやすいと感じた生徒が 85.5%(+1.1)であった。今後、これらの分析を進めるとともに、より生徒理解を深め、少人数等の授業の工夫をしていく。 *()は前年評価比
環境作り		・安心して学習へ取り組める良好な学級集団を育成する。 ・教室環境を整え、学習や行動の決まりを生徒にわかるように示す。		・学校が安心して学習に取り組める環境だと感じている生徒が 75.3%(+6.3)であった。この結果を踏まえ、全教員が学級集団の見守りと育成・環境作りをより整えていく。*()は前年評価比

■ 教科の取組内容

教科	令和元年度の定着度調査や 6月以降の学習状況に基づく分析	学力向上に向けての生徒の課題	改善のための取組	追加する取組等（12月）	年度末の取組評価（2月）
国語	調新3年生は、「知識・理解・技能」は全国を上回っているが、それ以外は全国を下回り、特に「書く能力」は全国より5ポイント以上低い。新2年生は、「書く能力」「読む能力」は全国を上回っているが、「話す・聞く能力」は2.7ポイント、「知識・理解・技能」は4.3ポイントの全国より低い。 学授業には意欲的に取り組む生徒が多いが、学習理解や学習内容の定着が不十分な生徒も多い。また、文章を書くことに対して苦手意識を持っている生徒も多い。	・書くことへの抵抗感を減らし、少しずつ書く文章量を増やしていくことが課題である。また、書くための語彙力を高める指導も必要である。 ・集中して聞いたり、大事なことをメモしたりする習慣が身につけていない。 ・文法や語句に関する学習内容が定着していない生徒が多いことが課題である。	・日常的に書くことを増やし、文章の構成や効果的な表現について計画的に指導し、それを生かす場面を意図的に設ける。また、国語辞典の日常的な利用を促す。 ・聞き取り練習などを定期的に行い、聞きながらメモをとったり、集中して聞いたりする習慣を身につけさせる。 ・文法や語句では、ICTを活用したり、例文を作るなど能動的な活動を入れたりすることで、知識の定着を図る。	・自分の意見を原稿用紙に書かせる授業を行い、「書く能力」「話す能力」の向上を図る。	・区学力定着度調査の正答率を見ると、第1学年は70.7%（全国平均71.3%）、第2学年は69.6%（全国平均70.4%）で、全国平均を若干下回っている。 ・第1学年では、「話し合いの内容を聞き取る」「漢字を読む」に課題が見られた。日常から要点を捉えて聞き取る練習や、漢字テストを行うことで、苦手分野の克服を図っていきたい。 ・第2学年では、特に「文法・語句に関する知識」「漢字を書く」に課題が見られた。定期的に小テストを繰り返し、学んだ知識の定着に繋げていく。
社会	調新2、3年生ともに各観点において、全国平均を若干下回っている。特に「知識・理解」では、全国平均値より低い傾向が見られた。「資料活用」の面でも課題が見られる。学力上位層と下位層との差が大きい傾向が見られ、下位層の底上げを図る必要がある。 「関心・意欲・態度」では、意欲的な面が見られる。 学授業は意欲をもって参加する生徒が多い。提出物の状況も概ね良好である。分野によって、興味・関心や学習への取り組みに差がある。	・社会的な事象に対する関心や意欲は高いが、授業で学習をしたことが定着していないことが課題である。 日本語の理解が難しい生徒も多い。 ・資料活用については、様々な資料を読み取ることを苦手にしているところが見られる。 ・社会的な判断力や表現力を付けていく上で必要な、基本的な知識が不足しているところが見られる。	・ICTや各資料、実物など視覚に訴える教材を有効に活用し、関心・意欲をさらに高める。 ・学習内容の定着のために、単元ごとの振り返りを授業の最後に確実に行う。 ・資料活用については、授業の中で地図や統計などの諸資料を扱い、読み取る力を高める。 ・社会的事象について、主体的な学習を通じ、自分の意見や他者の考えを積極的に取り入れ、思考、判断力、表現力を高めていく。 ・日本語の理解が難しい生徒に向けて動画や図、絵等を活用する。	・ICTを活用し、地図や統計などの諸資料を読み取る授業を行い、資料活用を技能向上を目指す。 ・動画や図、絵等を効果的に活用することで、関心や意欲を高め、学習の定着を図る。	・区学力定着度調査の正答率においては、第1学年は57.3%（全国平均54.5%）で全国平均を上回っており、おおむね良好といえる。第2学年は50.5%（全国平均55.7%）で、全国平均を下回っている。中でも知識・理解や活用に課題があり、今後はより一層、ワークシートや小テストなどの反復学習や資料の読み取りに力を入れ、基礎基本の充実と資料活用能力のさらなる定着を図る。 ・ICT機器の活用は、興味・関心を高めるとともに、思考力を付けることにも非常に有用で効果的であった。今後も、より積極的に行っていく。
数学	調新2年生は、全体の正答率が全国を上回っている。「数学的な技能」において全国を大きく上回った。「数と式」「図形」において全国を上回ったが、「関数」では全国より1.6ポイント下回った。新3年生は、全体の正答率が全国より0.4ポイント下回った。「数学的な技能」「知識・理解」が全国よりも下回った。「図形」「関数」において、全国を上回った。 学授業内における演習や発言では、意欲的に取り組んでいる生徒が多い。発展的な問題に対しても、既習事項を活用しながら解決に導くことができる生徒も多い。一方で、基礎的な技能、知識の理解が不十分な生徒もいる。	・新2年生については、「数学的な技能」および「知識・理解」において成果が見られている一方で、「見方・考え方」にやや課題が見られる。既習事項を活用して、発展的な内容に取り組んだり、なぜそうなるのかという原理について考えたりする力がやや不足している。 ・新3年生については、「数学的な技能」および「知識・理解」において課題が見られる。計算方法や用語といった基礎的な技能、知識を身に付ける必要のある生徒がいる。 ・どの学年においても、数学が苦手な生徒の、家庭での学習習慣が定着しておらず、日々の学習の復習を行わせることが課題である。	・習熟度別少人数授業を活かし、各コースに応じた授業内容を展開する。具体的には次の通りである。 ・発展的なコースでは、応用的な内容、問題について扱うとともに、解説の場面でも、生徒たちに「なぜそうなるのか」ということを積極的に考えさせるなどの、アクティブ・ラーニングを多く取り入れる。 ・基礎的なコースでは、基本的な技能や知識を身に付けさせるための演習や解説に多くの時間を割き、反復させることで身に付けさせていく。 ・定期考査だけでなく、定着度を生徒自身や教員が客観的に把握できるようにするため、こまめに小テストを行う。 ・家庭学習習慣が定着できるよう、授業終了時に授業の復習となる家庭学習課題を与える。	・区学力定着度調査（3年）では全国の平均を上回っている。今後も基礎学力の定着を図り、出来る喜びを感じさせることで課題を解決していきたい。 ・家庭学習習慣の定着のため、家庭学習課題等を提示し、質問教室等でサポートを行う。これにより基本的な学習習慣、学習内容の定着を図っていく。	・区学力定着度調査の正答率を見ると、第1学年は63.0%（全国平均56.6%）、第2学年は62.6%（全国平均58.8%）で、全国平均を上回っている。 ・第一学年では、「図形」に課題があるため興味ある課題を定期的に提示して考える力をつける。 ・第2学年では、「数と式」「図形」に課題があるため小テスト等で繰り返し学習の定着をはかり、基礎学力をつけていく。 ・家庭で自主的に学習に取り組めるように教科の中で工夫をしていく。特に、タブレットPCの活用を研究する。
理科	調第2学年では正答率48.8%で全国正答率とほぼ同等の結果になった。しかしながら粒子や観察実験の技能の分野の正答率が低い。 調第3学年では正答率48.6%で全国正答率をやや下回る結果になったが、実験時に目的を明示し器具の扱い等について説明の徹底を図った結果、知識や理解の定着が図られてきた。 学授業は意欲をもって参加する生徒も多いが、下位層の生徒の中には取り組み方（提出物の状況、実験レポートの提出）が不十分な生徒もいる。	・新宿区学力定着度調査の結果では全国平均をやや下回る結果になった。特に「観察実験の技能」や「知識・理解の定着」について課題が見られる。実験の目的や方法について順序立てて明確に説明し理解を促していくことが必要である。 ・粒子概念の形成は理解が難しい分野でもあるがICT等を用いて生徒が身近に考えることが出来るような授業方法を検討していくことが必要である。 ・知識の定着不足の生徒が多いが、この要因として家庭学習による学習内容の復習が十分でないことが課題である。 ・中位層～下位層は自ら課題をみつけ解決しようとする姿勢が不足している。	・授業の理解の促進の為ICTを積極的に用いるとともに、知識の定着を図るために授業開始時に授業のテーマの提示、終了時に授業内で行った内容に関する知識の復習、定期考査試験前の語句や知識の復習を行う。あわせて、家庭学習の充実も図っていく。 ・実験方法や実験により得られた結果について班で話し合い活動を行うことにより、自ら課題を解決しようとする姿勢を育成し中位層の底上げを図る。 ・実験の目的を明確化し、実験手順の意味を考えさせることにより実験内容の定着を図る。	・知識の理解や定着を図るために授業ごとのポイントをより明確化し授業終了時に振り返りを実施する。 ・ICTを積極的に活用し、家庭学習による知識の定着化を図っていく。	・区学力定着度調査における第1学年の結果では、標準スコア（偏差値）が53.9であった。単元ごとに、知識の活用の場面を設定できたことがよかった。「動物の分類」だけ自治体平均を下回った。動物の観察が課題である。実物を用意することが難しい場合でも、映像教材をより工夫していきたい。 ・第2学年では、区学力定着度調査において、知識理解や思考表現における結果はおおむね良好であったが、観察実験の分野に課題が見られた。見通しを持って観察実験を行い、結果をレポート等にまとめることを繰り返し指導していくことが求められる。
英語	調新2、3年生ともに、全ての観点における正答率は全国より上回っている。 調「聞くこと」の能力は全国平均より新2年が12.9%、新3年が6.2%上回っている。しかし、他の3観点は全国平均より上回っているものの、大きな差はない。 学授業には意欲をもって取り組んでいる生徒が多く、言語活動にも積極的な態度が見られる。一方で「話すこと」「書くこと」による表現活動には苦手意識をもつ生徒も見られる。課題提出に関しては、中位層・下位層を中心に取り組みが不十分な生徒がいる。	・「聞く」というインプットの能力は高いが、その聞いたものをアウトプットする機会に恵まれていない。そのためアウトプットの機会を増やし、授業における「話す」言語活動の機会を取り入れ、繰り返すことによって「表現の能力」の定着を図る必要がある。 ・「書く」ことにおける指導に重点をおき、自分の考えを3文程度の英文にする機会を多く増やす必要がある。	・既習事項の語彙や表現を用いて、英文を書くことを継続的に指導する。 ・教科書の各パートにある「Write」を活用することで、時には個人添削するなど短い英文を日ごろから取り組ませ、単元の後やDaily Sceneでまとまりのある英文に取り組ませる。 ・ペアワーク、グループワークを多く取り入れ、即興でも英語が出るよう、普段から自らの意見を表現し伝える活動を継続的に行う。	・第3学年では「話すこと」から「書くこと」につながる帯活動を計画し、ALTの添削を入れながら指導する。 ・第2学年では「話すこと」において従来型の会話テストだけではなく、落語テストで容易な英語で面白く伝えるパフォーマンステストを実施し、ただ読むのではなく英語で表現する喜びを感じさせる指導をする。	・区学力定着度調査における平均正答率をみると第1学年が全国平均62.6%に対して、本校の平均は69.2%、第2学年は全国平均56.4%に対して本校の平均65.0%とおおむね良好な状況である。 ・第1・2学年ともリスニングの分野において良好な成績を収めており、今後もリスニング副教材を帯活動で活用しながらの指導を継続していく。しかし両学年とも「場面に応じて書く英作文」や「3文以上の英作文」の正答率は低い傾向にあり、まとまりのある文を書かせる指導は今後とも重点を置き、指導する。

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況

学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況

※分量は2ページ以上となってもよい。